

(2) 指導者

- ・久慈市ふるさと体験学習協会職員
- ・NPO法人乗馬とアニマルセラピーを考える会 職員
- ・国立岩手山青少年交流の家 主任企画指導専門職 桑原 玲子
- ・国立岩手山青少年交流の家 企画指導専門職 丹 康浩
- ・国立岩手山青少年交流の家 企画指導専門職 中村 聡
- ・国立岩手山青少年交流の家 事業推進係長 田口 康宏
- ・国立岩手山青少年交流の家 事業推進係 佐々木 翔也

(3) 企画のポイント

虐待を受けた子供が、大人への信頼を回復し一歩前に踏み出せるように、ゆとりある日程の中で大人1名に子供が1～2名程度になるよう、大人との関わりをとれるようなスタッフの配置となるようにした。「アドベンチャー」をテーマにシャワークライミング・カヌー体験、乗馬などのチャレンジをとおして自己肯定感を高める活動と、うどん打ち・流しうどん体験などの交流をとおして社会性を養う活動を取り入れてプログラムを構成した。また、年間を通して各施設の登山やスポーツ大会、スキー教室等の行事のサポートを行い、子供たちとの関わりをもてるよう配慮している。

(4) 広報のポイント

参加対象者を4つの施設に入所している児童・生徒と限定したことから、公募の形ではなく各施設で参加者を4人以内で確定してもらった。参加者は様々な家庭事情を抱えているため報道機関への案内はあえて行わなかった。

(5) 運営のポイント

参加児童・生徒にタートルズキャンプへの共通理解を深めてもらうために、4つの施設を事業開始前に訪問し、交流の家職員から参加者に対する対応事例の説明と参加者同士の顔合わせ会を行った。顔合わせ会では、昨年度のキャンプの様子を紹介しながら、今年のキャンプの活動内容について説明することでキャンプへの意欲付けをするとともに、参加する職員を紹介しながら交流を図った。職員間でも、参加者への対応の仕方について共通理解を深めるために、参加者就寝後にスタッフミーティングを2日間行い、参加者の行動の変化や担当する班の様子について情報交換を行った。さらに、今回のキャンプは、所外での宿泊をプログラムに初めて取り入れ、安全面のガイドラインについて職員で共通理解をしたうえで行った。

7 成果とその普及

参加した児童・生徒が関わりを深め、進んでコミュニケーションを取り合う姿が見られた。2日目のカヌー体験では、4施設の参加者、職員がみんな交流しながら楽しんで活動する姿が見られた。最終日のうどん打ち流しうどん体験の班活動でも、他施設の子も入った男女混合の班だったにもかかわらず、それぞれの班で協力して活動する場面が見られた。他施設の下級生の子にうどんの打ち方や麺の切り方をやさしく教える姿が印象的であった。子供たちの自己肯定感を高める活動につながったものと考えられる。

施設の職員や交流の家職員の連携もうまく図ることができたことから、子供たちへの対応もスムーズにできた。何より今回は、活動の途中で抜け出したり、けんかをして活動をやめてしまう子供がほとんどいなかったことが大きな成果といえる。

今回は、子供たちのキャンプの変容を把握するために、参加者の感情を読み取るため「じぶんバロメーター」で自分のその日の感情を数値化し前日と比較した。「つながりマップ」では、自分の身近にいた人を記入させることでコミュニケーションの広がり把握した。また、事前事後に自己肯定感を図る10項目のアンケートを実施し分析を行い子供たちの変容把握を試みた。子供たちの変容を把握する有効な手段について考察する機会を得た。

8 今後の課題

キャンプに参加した児童・生徒の変容について、数値化したり、アンケートの記述で判断したり、客観的に判断する方法について様々試み、成果を把握することができた。今年度は、新たに記録写真の分析も行い数値化することも試みた。変容を把握するうえでの一つの方法となると考えている。来年度もさらに参加者の変容がわかりやすいように評価方法等について考えていきたい。

また、来年度の活動内容については、参加者のニーズと設定したねらいがずれないようにプログラムを構成していくと共に、子供たちが自己肯定感を高めるためのさらに一歩踏み込んだ活動を考えていきたい。



「シャワークライミング体験」



「うどん打ち体験」